

有訓無訓

自らの感性で価値を測り 自分の座標軸で生きる



はた けい
畑 恵

【作新学院副理事長、前参議院議員】

経営する学院の小学部に、全国でも評判の理科の教員がいます。彼の授業は最初から最後まで、とにかく活気に満ちている。どの子もキラキラした目で、「ハイ」「ハイ」と競って手を挙げ、矢継ぎ早に自分の意見を発表します。

私が参観した授業は、人がモノを食べて体重計に乗ると、体重は増減するかということがテーマでした。実験のビデオを途中まで見せ、まずは子供たちに仮説を立てさせます。教科書はあらかじめ読んでこないのがルール。答えが分かっちゃいますから。すると、弾けるように次々と十人十色の仮説が飛び出します。

この様子を見て、私は自分の先入観が完全に間違っていたと痛感しました。今どきの子はシラけているから自分なりの意見など言わない、そもそも日本人の性格からして手など挙げない、そう思い込んでいたのです。

しかし、環境さえ整えば、子供たちは、自分なりに見て、感じて、考えて、発表する。そうしたいと思っているのだ、と知らされたのです。

今でも、私が子供の頃に学校で感じた不自由さや、息苦しさは、基本的に変わっていないと思います。本来は学院に在籍する6500人の子供には、6500通りの個性があり、能力があり、感性があり、夢がある。ところが、日本ではそれを「発現」できない。

幼稚園から大学までの子供たちを日々見ていると、なぜか、大きくなるごとに生命力や好奇心、命の輝きといったものが劣化していくように見えることがあります。人間が本来持っているそうした特性を劣化させないで、大人になることはできないものか。

日本は主体的に生きることが抑制される社会です。既成の価値観とか、皆が分かりやすい尺度で一律に測って、その枠の中に押し込める。本人も最初は息苦しいと感じていたはずなのに、だんだん鈍感になっていく。それを「大人になる」と呼ぶことすらあります。

本当は価値観が多様だから面白いし、素晴らしい。そうした多様性が合わさるからこそ強さや豊かさになるのだと思います。すべてが同質では、とても弱く貧しくなってしまう。

人の目に振り回される虚しさに耐え切れず、キャスターを辞めてフランスのパリで2年半ほど一人暮らしをしたことがあります。パリは自分なりの価値観を持って生きる、自分の感性で価値を測ることを、何よりも尊重する街です。そこで私は、本当の自分として、初めて生まれることができたと思っています。

パリでは人がそれぞれの座標軸を持って生きています。日本では同じ座標軸の共有を求められるので、周囲の目に束縛され、他人と自分を比べ、その揚げ句、他人を羨んだり、嫉妬したり。確かに、パリのように各々の座標軸同士が常にぶつかり合う社会は疲れますが、自分を虚しくしては生きる意味がなくなってしまいます。自分をがんじがらめにしていたのは周囲ではなく、実は自己抑制してしまう自分自身だったのです。精神の自由の砦は自分の心の中に築くものだと、パリが教えてくれました。(談)